夕刊フジ　　2019年12月7日（6日発行）

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

⑬④ 元総理大臣　中曽根康弘

使命感がもたらした101歳

もしかしたら、この人は死なないのではないのだろうか…そんな畏れを抱くほどの迫力ある政治家でした。

中曽根康弘元総理大臣が、11月29日に都内の病院で亡くなりました。101歳と6カ月の生涯でした。大正、昭和、平成、令和を生き、また先の戦争を知っている最後の政治家の死でもあります。死因は老衰との報道です。

首相経験者の中で、百寿者（センテナリアン）としては第43代の東久邇宮稔彦王（享年102）に続き、2人目とのことです。

というわけで今週は、百寿者についてお話をしましょう。

20年ほど前は、多くの高齢者が、「長尾先生、100歳まで生きるためにはどうしたらよいでしょう？」と私に聞いてきました。しかし、時代は変わりました。「長尾先生、私、もし100歳まで生きちゃったら、どないしましょう？　お金もないし、家族に迷惑をかけたくない…早く死なせて」と希望される人のほうが多くなったのです。いやはやいつから日本はこんなことに…。

「寿命は神様が決めるもんや、生きたらええやん。でも、寝たきりよりも元気で100歳を迎えたほうがいいに決まってる。そのために毎日笑って、食べたいもん食べて、歩けるうちは歩こう」と伝えます。

わが国が百寿者の統計を取り始めたのは1963年のこと。その時は153人でした。1万人を突破したのは、98年。そして昨年のデータでは、約7万人に。男女比はなんと1対7です。老人ホームでも、男性はなんだか肩身が狭そう。だから男性の百寿者に出会うと「よくぞ生きてくれた！」と思わずハグしてしまいます。

100歳まで生きる条件を聞いてくるマスコミがいますが、確固たるものはないでしょう。運と遺伝としか言えないと私は思います。

しかし、中曽根さんの生き様を見ていると、国にわが身を捧げるという使命感があったので100歳を超えられたように感じます。

「まだ（国会議員を）やっているのかと言われる。マッカーサーは、〈老兵は死なず消え去るのみ〉と言ったが〈老兵は死なず消え去りもしない〉だ」

この名言を残したのは、85歳のとき。しかしその後、小泉純一郎首相（当時）から引退要請を受けて、怒りを露わにしながらこんな句を詠んでいます。

「暮れてなほ命の限り蝉しぐれ」

また、首相在任中は毎週都内の禅寺に行き、座禅を組んでいたというのは有名なエピソードです。御本人は精神統一のために行かれていたのでしょうが、ここで得られたであろう深い呼吸法も、長寿の秘訣（ひけつ）だったのかもしれません。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。